土木技術者の生活

話のひろば

樺島正二*

〝土木技術者の生活〟と一口にはいっても，昨年7月建設省を退ぞくまで学窓を出て 27 年3カ月ものあいだ，お前は土木技術者としてどういう生活をしてきたかと聞かれているのか，またその間どういう生活態度でことに臨んできたのか，あるいは土木技術者の生活はいかにあるべきかと尋ねられているのか，私にはその辺の編集子の意向が分らない。だから，そのいずれにもとれるよう，官界における土木技術者としてのコースを走り終った今の私として，その間に体験したこと，あるいは考えたことどもを，紙面の許す限り，書き綴ってみたいと思う。

人間だれしも，自己の生活に理想と誇りと満足を要求しないものはあるまい。そして，こうした生活こそが真の生がいであるというのが，私の学生時代からの一貫した信念であった。職業はこうした生活を実現するための基本的な手段であるが，といって職業としての誇りなり喜びがなくてはならないことは当然である。その意味で，将来土木技術者を職業として選んだ人々の中で，私ぐらい恵まれた環境に育った者もそう多くはないのではなかろうかと思い，今にしてすでに亡き父に深く敬意と感謝を捧げている私である。

というのは，私が大学の土木工学科に入ったとき，クラスメートの多くが，なぜ土木を専攻する気になったかということに対する回答として，「土木屋は地味だが浮き沈みがなく，どんな世の中になっても食いっぱぐれがないから」との考えのもとに入学してきていることを知って，私などむしろあっけにとられたものである。そして土木工学なるものがどういうことをやる学問であるかをしかと認識している者が存外に少なかったことも，また私の驚ろきであった。それればかりではない，あとで職員採用試験をする立場に立った私が，同じ工学でありながら土木以外の，つまり電気とか機械を専攻してきた高校生に土木の何たるかを尋ねてみて，彼らがほとんどそれを認識していないことを知るにおよんで，またまた驚ろかされたところである。そして，われわれはいつも土木技術者こそ文化社会と住民の福祉に基本的に貢献する最も大切な技術者なりとの自負のもとに，大いに張切り，多くは家庭生活をも犠牲にしてがんばっているというのに，世間一般の土木に対する認識の何とお粗末なことと，そうしたことに出っくわすたびに，私ははなはだ情けなく思い，ときには怒りをさえ覚えてきたものである。

そこにいくと，私など自慢じゃないが根っからの土木屋ともいえそうに思う。昭和 24 年に満 71 才で他界した私の父が土木技術者であった関係から，私など子供のころから，いわゆる門前の小僧式に土木技術の何たるかを，またその使命の尊厳さをもあらゆる機会に教え込まれてきたからである。中学に入ったころには，ときどき父の設計事務所に立寄っては，烏口で結構上手にトレースなどしてみせては父を喜ばせていたことを，今にして目前に思い浮べることができるのだから誠にほほえましい。中学といえば，私がその入学試験にパスして初めて真新しい制服制帽姿で意気揚々と父の前に立ったとき，父は「いやあ，おめでとう。立派になったな。どうだ，これからお父さんと一緒に一寸出かけないか，僕の恩師の広井博士に，僕のあと取り息子がこんなに大きくなったことを報告したら，きっと先生も喜んで下さるにちがいない。それに，君も将来土木技術者になるといっているんだから，あの偉い広井博士に一度お目にかかっておくことも，君のためにも良いことと思うからな」といい，それからすぐに二人で連れ立って広井先生のお宅を訪問した。ちょうど先生もご在宅で，われわれの訪問を心から喜んで下さった。私は今でもそのときの広井　勇先生のいかにも物静かな態度と，その慈愛に満ちた温顔をはっきりと思い出すことができる。先生はそれから間もなく，確かその年のうちになくなられたように思うので，私が広井博士にお目にかかったのは，これが最初で最後になってしまったわけだが，私にはその日の先生とのめぐりあわせが，何か私の将来の土木技術者を決定づけてしまったように思われてならない。訪問のなかばで先生は「君は将来何になるつもりだね？」と私に問われた。日ごろの父の言葉から，広井先生をむしろ畏敬していた私は，先生が父と談笑しているのをよいことに，出されたお茶をすすったり，お菓子をつまんだりしていたのに，いきなりほこさきをこちらに向けられていささかビックリ，口中の菓子に口をモゴモゴさせながら，とっさに起立，直立不動の姿勢をとって「僕は土木技術者に

* 正会員　KK奥村組　顧問

なりますッ!!」と元気な声で答えた。すると先生は立ち上って私のそばに寄られ，やさしく私の頭をなでながら「そうか，そうか，それはよかった。しっかり勉強して，お父さんに負けないような立派な土木技術者になるんだな」といわれたので，私が「ハーイッ!!」と答えると，なでておられた手を止め，私の顔を少し上向きにし，しばらくの間じっとものやさしい眼差しで私の顔を見詰めておられたが，その手を離すと「そうか，土木技術者になるか，それなら僕も君に何か記念になる物を上げておきたいな………，ちょっと待っておいで………何かいいものがあるか探してくるから」といって，応接間を出て行かれた。ややあって先生はもどってこられ，手にした1本の金張りエバー シャープを示して，「いいものがあったよ。これは僕がアメリカでパナマ運河工事に従事して苦学しているとき2本求めたもので，1本は僕が使っているが，日本に帰ってからだれかに土産にでもと思って買っておいたものだが，ちょうど見付かったよ。これを君の門出の記念にあげておこう」といって，私の胸ポケットにそれをさして下さった。先生宅を辞去しての帰途父は「僕は広井先生に随分可愛がってもらい，僕も先生を土木の先輩としてまた恩師として一番に敬愛してきたのに，とうとう何も先生の記念になるような物をもらわずにしまったというのに，君はたった一度お会いしただけで，そんな立派な記念品を頂いて本当にうまいことをしたよ。これは絶対になくすようなことなく，それでいつも偉い先輩をしのんで，必ずや先生の期待にそうようにしなくてはいかんよ」といって，私の幸運をえらくうらやましがったものである。家に帰ってから父の「そのシャープ，中学生には上等過ぎるよ。君が毎日持ち歩いていたらきっとなくしてしまうに決まっている。だから君が大学を出て一人前になるまでは，この僕が預かっておいてやろう」なる言葉にしたがって家の金庫の中にそれまで保管しておいてもらうこととなった。おかげで，学校を出，土木技術者として身を立てるようになってからすでに28年，今だにそのシャープは私とともにある。もっとも古いシャープ，しかも外国製のうえ，エバー シャープときているので，今ではこれにピタリと合う替芯がなく，使うことのできないのが誠に残念だが，あいかわらず私のシースの片隅で当時と少しも変わらぬ金色の光を輝かせ，常に私の行動を見守ってくれている。かく私は広井先生への公約どおり，結局は土木工学の専攻をするにはしたが，高校時代に目標を変えようと戸惑ったこともないではなかった。つまり，一度は外科医になることであり，また音楽評論家になろうかしらと考えたこともあったのである。もともと体の弱かった私のことだから医者になって体の弱い人のために味方になることも大いに意義のあることではあったが，日々の生活が，青ざめた病人ばかりのたむろする病院内で，寝ても覚めてもこうした人々ばかりに接しているんではとてもやりきれんとしまいには思うようになってしまい，また，音楽なら他の仕事をやりつつでもいくらでも勉強できるじゃないかと考えるに至り，やはり最も健康的な自然の外科医たる土木技術者になることが一番良いと意を決したもの，だから，先のクラスメートたちの考えに比し，私として専門の道に入るときには，すでにかなりの抱負といったものを懐いておられたのだから幸福と思う。

さてその抱負とは？

第一に自分の理想とする生活を確立すること，それはとりも直さず理想的な家庭の創造であった。そして第二には，みずからの理想とする土木技術者となること，これはなかなかにむずかしい問題であり，また人によってその考えかたも大いに異なるところだとは思われるが，私のはあるいはその育った環境の然らしむるところだったかも知れないが，自然，いわゆる技術者らしからぬ土木技術者になることを志ざすようになっていた。

鳥でも獣でもねぐらを持っている。一日の生存の戦を終って明日への意欲を貯える所がねぐらであろう。そこには他から犯し得ぬ真の平安と満ち足りた喜びがなくてはならない。動物に明日への意欲があるかどうかは知らないが，人間としてこれがないようでは，人間たるの資格を云々されても仕方なかろうと思う。そしてよほど特殊な人でない限り，だれでもが家庭というものを持っているにはいる。だが，果してそれが自他ともに許す真に平和な空気に包まれ，また明日への生活の楽しみに満ちあふれているものといえるだろうか。人間には世間ていもあり，見栄もあることだから，はたからはさもそれらしく見えるかも知れないひとつの家庭も，ひとたび中に入れば，その構成するメンバーのすべての人々にとって，うそいつわりなくわが家庭こそ真に平和と喜びのそれといい切れる家庭が一体どのくらいあるというのだろうか。

どんな人にも世の中での浮沈はあろう。人間生れてから死ぬまでの間，常に〝得手に帆を上げ〟式にいくものではない。たとえそれが極端ではないにしろ，必ず山あり谷ありの生活となることは避けられないところと思う。みずからの幸運にいかにも有頂天になって大いにはぶりをきかせていた人々といえども，明日には思わぬ悲痛のどん底に陥いって懊悩に明け暮れするに至ることも大いにあり得るところである。そうしたときに，真に心から彼を慰め，これに救いの手をさしのべてくれるのは彼の妻子のいる家庭をおいて他にはないのではなかろうか。人間ひとたび落目に立つならば，昨日までの友も奉仕者もすでに彼を見棄てて他に走り，もう見向きもしてくれないというのがこのせち辛いうき世の常なのではな

かろうか。この現実に打ちひしがれ，悲嘆に暮れて力なく彼が歩み行く先は，自分のねぐらを除いて他にはないはず，ところが力尽きてやっとのことでそこに到達したときに，万一これを迎えた妻子が目に角を立て白眼をむいて「いまじぶん何しに帰ってきたのか」といった調子で接してきたとしたらどうだろう。そのときになって，今まで家庭をないがしろにして顧りみなかったみずからの非を後悔してみたところでもう遅い。人生にこれほどの悲惨事があろうか，もう生きる望みもつき果ててしまうのではなかろうか。これは何といってもたまらないこと……。私はかく考えたればこそ，第一に述べたような家庭第一主義でいくことをすでに学生時代から決意し，この私の主義に同調し，これをいっそう盛り上げてくれるような伴侶をこそ将来の妻として，何をおいても求めねばならぬと固く心に誓ったものである。ここで，すべてに優先して自己の家庭第一主義を貫ぬくといったところでそれは決して利己主義に徹するという意味ではない。小学校のころより，私の友人とか近所の人々の家で，親父が名利を追求するの余り，その家庭の空気を台無しにしている例をよく見かけてきたものだが，世の中には社会的に名声を博しまた金持になって金を自由にできるようになった人々は，とかく家庭をないがしろにしていることが多いように私には思えてならない。家族の幸福のために，出世することも有名人になることも必要，また裕福になることも大切には違いない。しかし，そのために家庭の空気を毒するようなことがあったのでは本末転倒もはなはだしいといえるのではなかろうか。そうした意味で，先の言葉は私が家庭を犠牲にしてまでは名利に限らず，なにごとの追求もしない。常に家族とともに，そして家庭の幸福を第一にと考えてすべての自己の言動を律することを，わが理想としていたということなのである。その結果，私は幸いにもいたずらに出世を夢見ることもなく，いつも仕事に生きることができたと思っている。特に役人の場合，大抵のポストはだれにでも1,2年の間なら大したボロも出さずにつとめることができると思われるが，これはといった特別な仕事になるとそうはいかないのだから，ただただ仕事本意に生きぬいて，他の人のできないような仕事を美事完遂したときの満足感と幸福感は，何物にも勝る生がいということができると，私には考えられてならない。

第二の技術者らしからぬ土木技術者ということは，よく世間でいわれる技術者の偏狭とうぬぼれ，かたくなと独善の弊をいましめること以外の何物でもない。

小さいときから父のもとを訪れる多くの技術者に接してきた私は，その人々が専門の技術者としてはあるいは立派であったのかも知れないが，技術以外のことをほとんどしゃべることなく，技術者ならざる周囲の人々をともに楽しませるといった話題の持ち合せ，あるいは話術に欠くる場合が誠に多く，私から見ても，彼らが人間的にはなはだ物足らなく思われてならなかったという私の経験が，かく考えさせるに至ったものと思っている。

それには専門外の勉強が必要になる。私は専門のことはどうせその道に入ったならとことんまで研究しなくてはならないし，しかもそれは一生の間のことである。だから学校を出てしまえば嫌応なしにこの専門の道に終始せねばならないわれわれに，自由のあるのは高校，大学の時期をおいてほかにはこれを求めにくいことと考え，この学生時代につとめて専門外の知識を吸収するよう心掛けたものである。その結果，人間的に生きる道として，私は文学と音楽を選ぶこととしたもの，今にして考えると，学窓をでるまでに岩波文庫を全部読破することと，ひとつの楽器をマスターするという悲願を立てて，これにあらゆる時間をふり向けて努力を重ねたということが，私のその後の人となりと人生に大きく影響をおよぼしていることはいわずもがなで，私としてかく努力したことを今にして大いに誇りとし満足を覚えておれるのだから，本当に幸福だと思う。

かく学生時代に決意し，これが実行に絶えざる努力をしてきた私が，こうした考えによって社会に出てから取組んだこれはといったむずかしい仕事の解決に，それらがどれだけ役立つに至ったかは，私を知る多くの人々がよく認めてくれるところと思う。皆のいう〝樺島の神通力〟こそこうした学生時代からの私の理想に対する努力と精進のお蔭というほかに私としても説明がつかないような気がしてならない。

そして一度でもわが家を訪ねてくれた人が，〝世の中にこういったムードの家庭もあったのだろうか〟とうらやみ，あたら青春をむざむざと捨てさることができようかと独身を謳歌していた青年男女が，ひとたびわが家を訪れて帰ったとき，自分も早く結婚したくなったともらしたという話を何度か聞かされたが………。また，旅行中など，あるいは人の集る場所などで私を知らぬ人々から「貴下のご職業は？」と聞かれ，「何に見えますか」と反問，種々のヒントまで与えたにもかかわらず，ついにだれ一人として私を役人と，また技術者といい当てる人のいなかったこと………。これで私が先に上げた二つの理想の成果が想像できるのではないかと私には考えられるし，現に私もこれに満足し，誇りをさえ覚えているところである。

ここでもう一度与えられた標題〝土木技術者の生活〟を思い出してみよう。

今まで述べたことがらは，何も土木技術者の生活に限

られたものではなさそうに思う。かく生活してきた私がたまたま土木技術者だったればこそ，あるいは〝土木技術者の生活〟といえる態のものだと思う。しかし私にとっては，たとえ自分の専門なり商売が何であったにしても，ここに述べたわが理想が変わることは恐らくなかったであろうと，自信を持っていうことができるのである。

さて先にいう家庭論といえども，それがそれ相応の給与で裏付けされねばならないことは論をまたない。と思うとわれわれの給与は誠にお粗末というのほかはない。これは日本の給与所得者全般についていえることなのではあろうが，確かに安い。そこでわれわれの間から給与改善の叫びが絶えず上り，またその運動が行なわれていることはご承知のとおりである。

科学技術の尊重と振興は，いつの政府においても叫ばれこそすれ，役所においてさえ，特に技術者が優遇されているようには思われず，むしろともすればいささか軽視されがちであることは，技術者の一人として私にも全く納得しがたいところである。そして建設省における技術者の団体たる全建が，この問題を常に取り上げ，何とかして技術者が他より優遇されるよう切なる運動を続けていることも当然といえば当然のことである。しかし私は給与の若干増額だけで，技術の尊重あるいは技術者の優遇と考えること自体，技術者として大いに反省しなければならないのではないかと，機会あるごとに若い人々に指摘してきたところである。

役所の若い技術者はとかく事務官僚をつとめて軽視しようとし，何でもかんでも技術者でなくてはならないように叫び続けているようだが，相手を無視することで自己の価値がそれだけ上るわけのものでもない。こうした傾向など，卒直に評するなら，先に述べた技術者の偏狭と独善といわれても仕方がないように思われる。そしてそうした考えだからこそ，勢い中途半端な技術者がふえることになり，結果的には技術の権威を低下せしめ，長い間の悲願たる技術者優遇にかえって逆行する事態を招くに至るのではないかということを恐れるものである。

いくら口先で科学技術の尊重を叫び，技術者の優遇を念願したとて，それだけでだれもが真面目に考えてくれるわけでもない。要は技術の尊厳と偉大さを，われわれが身をもって国民の前にそれがたとえ常識的と思われ，ごくわずかなものであったとしても，これでもか，これでもか式に示すことになれば，頼まないでも科学技術に対する認識は改まり，おのずとわれわれが多くむくわれる結果を生来するのではないかと私には思われる。さすがは科学者だ，やはり技術者は大したものと，人々が科学技術を讃美し，畏敬するだけの実績を日々折にふれて彼らに示し得たならば，国民のだれもが科学技術者を黙って放っておくことをしないであろう。そうした意味で，今までのわれわれのあり方に問題がないわけではないと思われる。まず自重自戒の切なるを覚えることしきり……。

それに土木技術というものは他の科学に比して最も庶民的というか，あまりにもわれわれの生活に密着している部面がある。無人島に漂着したロビンソン クルーソーならずとも，人の生活と土木技術は，意識すると否とを問わず，いっときといえども切り離なすことはできないのである。つまり，われわれの生活全般のベースを形づくるものが土木技術といえよう。それだけに計算づくでは出てこないむずかしい分野がきわめて多く，土木技術者の苦労も正に並大抵なものではないのである。そのくせあまりにも庶民的なるがゆえか，かえって他の分野より技術者扱かいされないうらみがあるように思われるのは，単に私のひがみ根性のせいなのであろうか。

ともあれ，土木技術は公共の施設に貢献するところが多い。だからそれだけ広範囲における対人関係の問題がこれにつきまとい，その解決なくしてはせっかくの技術の成果も上げ得ないというのが現実の姿，それでなくてもおくれがちな文化産業基盤の整備を考えるとき，これらに当る責任ある土木技術者のあり方も，真剣に考えられなくてはならない。それには単なる土木技術の研究にこり固まっていただけでは，その難関を突破する智恵も出てこないのではないかと思う。

最後に，私ももとよりこうした困難を何とか突破してきた経験を幾多持っているのだが，それは最初に上げたかつて私のいだいた二つの理想の追求への努力が大いなる原動力となり，それがそうした部面に自然に有効適切に効果を発揮してくれたからこそと，自信をもっていえることをここに重ねて申し上げ，あわせてこれこそ真にわが力でつくり上げたというみずからの作品が，社会国家に直接に貢献し，その威力を発揮してくれていることをもって，〝よくと土木屋に生れける〟との喜びと誇りにひたり得る身の幸福を心から感謝しているところである。

はなはだ手前味噌な雑文となり恐縮にたえないが，私の敬愛する土木技術，また土木技術者の方々に，これが多少とも参考になるならばと考え，あえてペンをとったような次第，平にお許しを願いたいと思っている。

(1965. 7. 8 受付)

日本の土木技術 ——100年の発展のあゆみ——

体　裁：A5判488ページ　定価：1200円　送料：150円

申込先：東京351—5130 土木学会へ　振替東京16828番